

連続シンポジウム 「分離派建築会誕生 100 年を考える」 第 7 回
分離派建築会の展開 ー新しい都市と社会をめざして

‘建築的なものから建築’へ ー蔵田周忠の実験的活動

岡山理香／東京都市大学

「当時、分離派を生んだウィーンが日本の関係者に羨望のまなざしで学ばれ語られる中で、蔵田周忠は 1919 年に設立されたバウハウスの理念を語る高等工芸ただ一人の教官だった」と語ったのは、豊口克平である。豊口は、蔵田周忠（1895-1966）が講師を勤める東京高等工芸学校の教え子で 1928 年（昭和 3）に結成された‘型而工房’の一員でもあった。

蔵田とその教え子たちは、新しい時代に即した住空間と生活の問題を解決するためにこの工房を立ち上げた。その 4 年後には、住宅生産の合理化をはかることを第一の目標として‘日本トロッケンバウ研究会’が結成された。本シンポジウムでは、分離派建築会のメンバーであった蔵田周忠が‘建築的なもの’への憧れから実際の‘建築’、特に人々の住まいへと関心を寄せていった軌跡を辿り、‘型而工房’と‘トロッケン・バウ（木骨乾式工法）’という実験的活動が今日の私たちの生活へと続く道を切り開いたであろうことを検証してみたい。

分離派建築会は、1920 年（大正 9）東京帝国大学建築学科の同級生 6 人（石本喜久治、瀧澤眞弓、堀口捨己、森田慶一、矢田茂、山田守）によって結成された。蔵田は、1921 年（大正 10）東京府主催の「東京平和博覧会」（1922 年）準備室に入職したが、そこで同じ設計技術員として堀口捨己と瀧澤眞弓に出会った。彼らに啓発され、分離派第 2 回展（1921 年）から参加することとなった。最終回となる第 7 回展（1928 年）まで建築のスケッチや模型などを出展、運営にも携わった。

蔵田は、分離派建築会の「建築を芸術として捉える」態度に共鳴しながらも、関東大震災（1923 年）によって一変した東京を目の当たりにして、より現実的な態度を持って「社会生活の一機関」としての建築に向かっていくこととなる。1930 年（昭和 5）から 31 年（昭和 6）にかけてベルリンを拠点として、ヨーロッパ各地を視察した。デッサウのバウハウスも訪れている。ヴァルター・グロピウス、エルネスト・マイラにも面会し、ドイツの住宅事情をつぶさに取材した。

帰国後、蔵田周忠設計事務所を開設し、翌年に武蔵工業大学の前身である武蔵工業専門教授に就任。今後の都市生活に最もふさわしい居住形態を構想する上で、蔵田は一つのお手本をドイツのジートルンクに求めた。それを日本的にアレンジした‘トロッケン・バウ（木骨乾式工法）’によって、実現した住宅群（等々力ジートルンク）についても紹介したいと思う。



图1 奏楽堂/葺田周忠/1922



图2 米川邸/葺田周忠/1927



图3 勝野邸/葺田周忠/1929

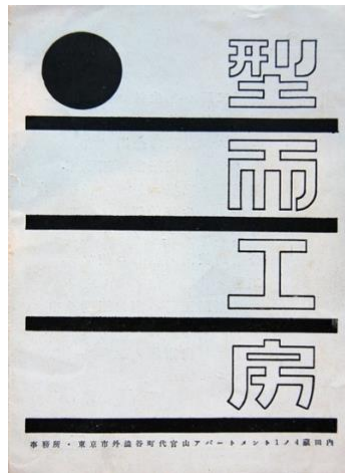


图4 型而工房/1928

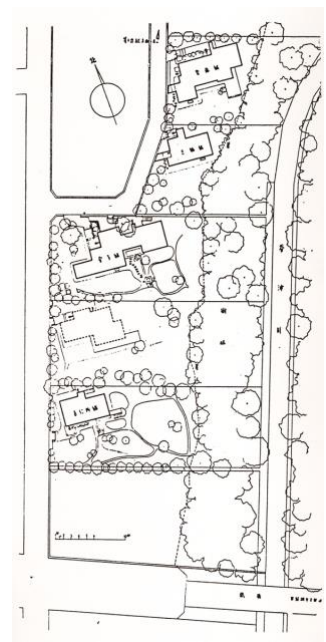


图5 等々力住宅区/1936



图6 金子邸/葺田周忠/1936



图7 武蔵工業専門学校/木村幸一郎/1932